

第2章 整除関係

2.1 割り算と余り

整数全体の集合 \mathbf{Z} では、足し算と掛け算が定義されていて通常の演算規則、すなわち、**結合法則**、**交換法則**、**分配法則**が成り立っている。さらに、 \mathbf{Z} は 0 と負の数を含むので、引き算もいつでもできる。しかし割り算は必ずしもできない、つまり割り算の値が整数の範囲に納まらないことがある。このような場合でも、小学校で学んだように「余り」付きの割り算はいつでも可能である。すなわち、2つの整数 a, b に対して、商 q と余り r が定まり、関係式 $a = qb + r$ が成り立つ。この事実を定理として精密に定式化しておこう。

定理 2.1 (割り算の定理) 任意の $a, b \in \mathbf{Z}$ (ただし $b \neq 0$) に対して、

$$a = qb + r, \quad 0 \leq r < |b|$$

をみたす $q, r \in \mathbf{Z}$ が存在し、しかもそれらの組は一意的に定まる。

証明 絶対値の大きい負の整数 x をとれば、 $a - x|b| \geq 0$ とできるから、集合

$$R = \{a - x|b| \mid x \in \mathbf{Z}, a - x|b| \geq 0\}$$

は空集合ではない。そこで R の最小元 r をとる; $r = \min R$ 。この $r \in R$ を実現する $x \in \mathbf{Z}$ をあらためて p と書けば、 $a = p|b| + r$ であるが、ここで、もし $|b| \leq r$ とすると、

$$0 \leq r - |b| = (a - p|b|) - |b| = a - (p+1)|b| \in R$$

となって、 $r = \min R$ に矛盾する。したがって $0 \leq r < |b|$ が成り立つ。さらに、 b の正負にしたがって $q = \pm p$ とおけば、 $a = qb + r$ が成り立つ。

次に一意性を示すために、整数 q, r, q', r' が

$$a = qb + r = q'b + r', \quad 0 \leq r, r' < |b|$$

をみたすとして、 $q = q', r = r'$ を示そう。もし $q \neq q'$ ならば $|q - q'| \geq 1$ であるから、 $|r - r'| = |q - q'| |b| \geq |b|$ となって $0 \leq r, r' < |b|$ に矛盾する。よって $q = q'$ であり、これから $r = r'$ も得られる。□

2.2 約数・倍数

前節冒頭に述べたように、 \mathbf{Z} においては加減乗除のうち3つの演算、 $+$, $-$, \times は自由にできて通常の演算規則が成り立つが、除法すなわち割り算 \div は必ずしもできない。そこで、「割り切れる」かどうかを \mathbf{Z} における最初の問題として浮上する。

整数 a が整数 b で割り切れるとは、 $a = bc$ をみたす整数 c が存在することである。このとき、 b は a の約数である、または、 a は b の倍数であるといい、

$$b|a$$

で表す。 $b|a$ でないときは $b \nmid a$ と書く。たとえば $2|6$, $4|10$, $(-3)|12$ である。約数や倍数によって表される整数の関係を整除関係という。

1 や -1 はすべての $a \in \mathbf{Z}$ の約数であり、0 はすべての $a \in \mathbf{Z}$ の倍数である。一方、1 の約数は 1 または -1 だけであり、0 の倍数は 0 だけである。記号 $|$ を使って表せば次のようになる；

- すべての $a \in \mathbf{Z}$ に対して、 $1|a$ かつ $(-1)|a$ かつ $a|0$.
- $a|1$ ならば $a = \pm 1$.
- $0|a$ ならば $a = 0$.

これらは、1 と 0 にまつわる極端な性質である。とくに 0 や負の整数との整除関係は小学校では扱わなかったので少し戸惑うこともあるかもしれないけれど、もうこどもじゃないもん、慣れれば難しくないもん。次の命題もひとりで証明できるもん。

命題 2.2 $a, b, c \in \mathbf{Z}$ とする。

- (1) $a|b$ かつ $b|a$ ならば、 $|a| = |b|$.
- (2) $c|a$ かつ $c|b$ ならば、任意の $x, y \in \mathbf{Z}$ に対して $c|(ax + by)$.

整数 a, b の**公約数**とは a, b のどちらの約数でもある整数のことであり、**公倍数**とはどちらの倍数でもある整数のことである。さて、次に述べる最大公約数と最小公倍数の定義は、小学校で学んだものちょっと違っているが、これがおとなの定義である。

定義 2.3 (最大公約数・最小公倍数のホントの定義) a, b を整数とする。

- (1) 0 以上の整数 d が a, b の公約数であり、かつ a, b の任意の公約数が d の約数であるとき、 d を a, b の**最大公約数**といい $\gcd(a, b)$ で表す。
- (2) 0 以上の整数 m が a, b の公倍数であり、かつ a, b の任意の公倍数が m の倍数であるとき、 m を a, b の**最小公倍数**といい $\text{lcm}(a, b)$ で表す。

なぜ、このような定義を採用するのか？ 小学校では、正の整数つまり自然数のペアについてだけこれらを定義したのだが、ここでは、0 や負の整数も含めて例外なしに一般の整

数のペアを扱うため、というのが理由のひとつである。 $ab \neq 0$ のとき（つまり a も b も 0 でないとき）,

$$\gcd(a, b) = \max \{ c \in \mathbf{N} \mid c|a, c|b \}, \quad \text{lcm}(a, b) = \min \{ c \in \mathbf{N} \mid a|c, b|c \},$$

$ab = 0$ のとき（つまり $a = 0$ または $b = 0$ のとき）は,

$$\gcd(a, 0) = |a|, \quad \gcd(0, b) = |b|, \quad \text{lcm}(a, 0) = \text{lcm}(0, b) = 0$$

となっている。

命題 2.4 $a, b \in \mathbf{Z}$ とする。整数を成分とする 2 次正方行列 A に対して、 $c, d \in \mathbf{Z}$ を

$$A \begin{pmatrix} a \\ b \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} c \\ d \end{pmatrix}$$

によって定めると、次が成り立つ。

- (1) $\gcd(a, b) \mid \gcd(c, d)$.
- (2) $\det A = \pm 1$ ならば $\gcd(a, b) = \gcd(c, d)$.

証明 $A = \begin{pmatrix} x & y \\ z & w \end{pmatrix}$ とおくと、 $c = ax + by$, $d = az + bw$ である。 $g = \gcd(a, b)$ ならば $g|a, g|b$ だから、命題 2.2 (2) を使って $g|c, g|d$ 。したがって g は c, d の公約数となるから $g \mid \gcd(c, d)$ であり (1) が示された。(2) を示すために $\det A = \pm 1$ とすると、 A の逆行列 $B = A^{-1}$ も整数を成分とする 2 次正方行列で $B \begin{pmatrix} c \\ d \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a \\ b \end{pmatrix}$ をみたすから、(1) より $\gcd(c, d) \mid \gcd(a, b)$ であり、これから (2) が成り立つことがわかる。 \square

2.3 ユークリッドの互除法

割り算の定理の応用として、2つの整数の最大公約数を効率よく求める方法が、以下に述べる**ユークリッドの互除法**である。整数 a, b に対して $\gcd(a, b) = \gcd(|a|, |b|)$ かつ $\gcd(a, 0) = |a|$ なので、はじめから $b > 0$ として最大公約数を考えればよい。

定理 2.5 (ユークリッドの互除法) 整数 a, b (ただし $b > 0$) に対して、 $a_0 = a$, $a_1 = b$ とおき、数列 $\{a_n\}_{n=0,1,\dots}$ を、 $a_n \neq 0$ である限り

$$a_{n-1} = q_n a_n + a_{n+1}, \quad 0 \leq a_{n+1} < a_n$$

によって定めることができる。さらに、ある $N \geq 1$ に対して $a_{N+1} = 0$ となり、そのとき

$$a_N = \gcd(a, b)$$

が成り立つ。

証明 まず、定理 2.1 を繰り返し適用すれば、数列 $\{a_n\}_{n=0,1,\dots}$ が定まることはすぐにわかる。また、 $0 \leq \dots < a_2 < a_1 = b$ だから、この操作を（多くとも b 回）繰り返せば $a_{N+1} = 0$ となる $N \geq 1$ が得られることがわかる。一方、

$$\begin{pmatrix} a_{n-1} \\ a_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} q_n & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a_n \\ a_{n+1} \end{pmatrix}, \quad \begin{vmatrix} q_n & 1 \\ 1 & 0 \end{vmatrix} = -1$$

なので、命題 2.4 によって $\gcd(a_{n-1}, a_n) = \gcd(a_n, a_{n+1})$ であり、これを繰り返せば、

$$\gcd(a, b) = \gcd(a_0, a_1) = \gcd(a_1, a_2) = \dots = \gcd(a_N, a_{N+1}) = \gcd(a_N, 0) = a_N$$

となる。 □

定理 2.6 $a, b \in \mathbf{Z}$ の最大公約数を d とすると、

$$ax + by = d$$

をみたす $x, y \in \mathbf{Z}$ が存在する。

証明 $b > 0$ のときにのみ確かめれば十分である。このとき、前定理の証明から、2 次正方行列 A で $\begin{pmatrix} a \\ b \end{pmatrix} = A \begin{pmatrix} d \\ 0 \end{pmatrix}$, $\det A = \pm 1$ をみたすものがとれる。そこで、 A^{-1} の第 1 行を (x, y) とすれば、 $x, y \in \mathbf{Z}$ であり $ax + by = d$ を得る。 □

証明中の A^{-1} は、定理 2.5 の証明に現れる行列 $\begin{pmatrix} q_n & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$ の逆行列 $\begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & -q_n \end{pmatrix}$ の積

$$A^{-1} = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & -q_N \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & -q_{N-1} \end{pmatrix} \cdots \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & -q_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & -q_1 \end{pmatrix}$$

として計算でき、原理的にはこれから x, y を求めることができる。

例 2.7 ユークリッドの互除法を用いて、190423 と 173419 の最大公約数を求めてみよう。

$$190423 = 1 \cdot 173419 + 17004,$$

$$173419 = 10 \cdot 17004 + 3379,$$

$$17004 = 5 \cdot 3379 + 109,$$

$$3379 = 31 \cdot 109 + 0$$

より $\gcd(190423, 173419) = 109$ を得る。また、

$$190423x + 173419y = 109$$

をみたす整数の組 (x, y) を見つけるには、前述のように行列の積を計算すればよいが、ここでは上の計算を逆にたどって求めてみる。

$$\begin{aligned} 109 &= 17004 - 5 \cdot 3379 = 17004 - 5 \cdot (173419 - 10 \cdot 17004) \\ &= 51 \cdot 17004 - 5 \cdot 173419 = 51 \cdot (190423 - 173419) - 5 \cdot 173419 \\ &= 51 \cdot 190423 - 56 \cdot 173419 \end{aligned}$$

したがって、 $(x, y) = (51, -56)$ が得られる。